昭和八年（一九三三）を漆で語る

灰野昭郎

昭和八年、明治維新後六十五年にあたる年である。

二月二十日、小林多喜二、特高の拷問を受け死亡。同二十三日、関東軍、熱河省への侵攻を開始。三月二十七日、国際連盟脱退の詔書が発布される。四月二十二日、文部省、京大滝川教授の辞職を要請。八月九日、関東地方で大防空演習が開始される。十二月二十三日、「日嗣の皇子」皇太子（今上天皇・明仁）午前六時三十九分に誕生。この事を新聞は「暗い世相を包んだ奉祝行事」、この年を「非常時日本」と総括した。ただこの年、「東京音頭」の大流行、丹那トンネル貫通、米映画「キングコング」の封切、「日本美の再発見」のブルーノタウト来日という年でもあった。

このような年をなぜ漆で語ろうとするのか。筆者はこの昭和八年は近代漆工史上最重要な年であると考えているからである。順次、縷々、述べていく。

まず、この年、九月一日、東京市日本橋區「丸善株式會社から澤口悟一著『日本漆工の研究』（定價七圓）が発行されている。

自序でいう。

「漆工の技術は日本及び支那に於ては古代より發達し、殊に蒔繪は我國の特有にして眞に他邦の模倣を許さず、又髹法も我國に於ては特殊なる發達を遂げ是又他邦の追從を許さゞる所である。其他の朝鮮及び印度支那方面に於ても漆器を產するが、技術は幼稚にして我國の漆技に比較するときは實に雪壤の差がある。近年朝鮮樂浪郡趾より出土の漆器に依り支那漢代の漆技は俄に有名となつた。併し我國最古の遺品である天平時代の漆藝に比すれば、其の構想技巧共に何れの點より觀察するも及ばざること遠く、唯天平時代よりも一層古きを以て歷史的には賞讃に値すべきものである。さて我國の漆藝は既に奈良朝に於て著しき發達を示したるも、其後の進步は比較的緩慢にして古來の製作法を蹈襲したるものも尠くない。然れども蒔繪は各時代に於て其時代精神と繪畫の影響を受けて進步發達し、各其時代の特色を發揮し後世

の標範となるべき名品を遺したのである。併し此等の進歩發達の經過は遺品によりて知ることを得れども、實際は所有者に深く秘藏され公開せらるゝこと稀にして研究の便に乏しい。而して又技術的には文獻の徵すべきものなく後世の研究者には遺憾とする點が少くない。次に古來我國の工藝に關する技術教育は、直接の指導よりは寧ろ以心傳心と稱し自ら勵み自ら之を體得せしめたのである。殊に甚だしきものに至りては師弟間に於ても技術の眞髓は之を秘密となし、況して之を發表公開するが如きは實に思ひも寄らぬことであつて、今日も尙此遺風は各地に存して一子相傳を實行する地方もある。されば後世に傳ふべき技術に關する文獻の稀なりしことは敢て怪しむに足らない。然るに現代に於ては一般に教育の普及發達と共に、漆工に關する技術も亦書籍によりて之を學ばんとする傾向が著しくなつた。之は畢竟時代の要求である。著者は漆工に關し實地指導の爲めに全國各府縣に出張し、又母校東京美術學校の講師を囑されて一層此の感を深くしたのである。然れども未だ此の要求に應ずべき專門の圖書なく、又類書も五指を屈するに足らない。是が淺學非才を顧みず余の本書を著さんとしたる動機である。而して又多年商工省東京工業試驗所に於て漆工に關し試驗研究したる其成績及び研究報告中より要旨を抄錄し、併せて讀者の便に供せんとしたるものである。然れども本書は公務の餘暇に於て執筆したるものなれば、推敲の餘裕に乏しく且又不文の著者は十分に其意を盡し得ざりしことを大に遺憾とするものである。之は幸に先輩及び識者の叱正によりて其誤りを正し、又著者自らも更に研究を續けて再版の機もあらば、改善を加へんことを心窃に期待して已まざる所である。唯本書に於ける各種の製作法及び研究事項は、著者の實驗に基礎を置きたる點は聊自負する所である。若しも本書が漆工業者の師友となり又關係工藝家の參考となり、或は學校に於て教授上に又は學習の參考資料とならば著者の幸や之に過ぐるものはない。

本書の刊行に方り、商工次官吉野信次閣下、東京工業試驗所長工學博士小寺房治郎閣下、特許局電氣化學部長工學博士三山喜三郎閣下、帝國美術院長正木直彥閣下より序文を賜はりたることは著者の光榮之に過ぐるものなく爰に深厚なる感謝の意を表す。

昭和八年五月五日

そして、「結論」で云う。

「我國の漆工に關しては既に各章に於て詳說したる如く全く我が國內に於て獨自の發達を遂げたることは明瞭である。而して漆工は工藝的要素の豐富にして又特殊の品格と高尙優美なる趣味を有し燦然として世界各國に誇るべく眞に我國特有の工藝である。更に之を工業的見地より觀察するときは漆の特性なる拔群の堅牢度と光澤の優麗及び觸感の爽快は斷じて他の塗料の企及し能はざる所である。されば此の特性を利用して現代に適應すべき新用途を海外に向つても開拓せねばならぬ。而して又漆工業は我國產業上に重要なる位置を占むるのみならず

輸出品としても重要であり且つ世界に競爭者なきを以て世界獨歩の觀がある。近頃輸出振興策の一として他國の企及し能はざる我國固有の工藝品の輸出を增進せんとする機運は政府當局及び工藝界にも漲り將に時代の要求である。

從來の漆工は其の進歩改良に際し學理の研究を等閑に附したるの憾みあり又機械力應用の如きも藝術的方面に於ては藝術を解せざる行爲として排斥されし感があつた。又工業的方面に於ても此の情勢は影響する所が僅少ではなかつたのである。然るに時勢の進歩は斯る姑息の觀念を一掃するに至つたことは斯業將來の爲に大に慶すべきことである。而して漆工の將來に處すべき道は藝術的方面既ち美術工藝と、工業的方面既ち產業工藝の兩方面に向ひ研究の態度を決して專門的に進まねばならぬ。美術工藝には千古百錬の傳統的技術を活用し又意匠圖案は曾て光琳の圖案が世界的流行の中心地である巴里に於て其の標範を示したる如く、此の卓越せる我が國民性を發揮せねばならぬ。產業工藝には特に專門の科學的研究が必要であり又機械力を應用し形狀を統一すると共に大量の生產に適せしめる。尙ほ家內工業にして且つ製作法の一定せざる漆工製作法に對し、又同時に分析するにあらざれば其の品質を識別し難き漆液に對し、規格を定めて之を統制し又品質を明かにする必要がある。爰に於て合理的に從來漆工業の有する諸種の缺點を除却改良して完全なる漆工業を樹立せねばならない。而して全國の漆工家は一致協力して斯道の進歩を期し又一層奮勵して我國漆工業の振興發展に精進して已まざることを希望する。幸に本書が此の要求に幾分にても副ふことを得れば著者の勞が徒にあらざりしことを大いに滿足に思ふものである。」

内容は次の十章から成る。

「第一章　漆工史」は漆工史論にはじまり、天平時代から明治・大正時代、また琉球漆工史から中国の漆工、暹羅（シャム）（タイ）の漆工にまで及ぶ。

「第二章　全国漆器生産及輸出の概況」は北海道から鹿児島、沖縄、朝鮮に及び、輸出漆器業の概況を報告。

「第三章　漆」は生漆・漆樹・採集法・栽培・製漆法・漆液の学術的研究等。以下、「第四章　材料及要具」「第五章　素地」「第六章　糅漆」「第七章　蒔絵」「第八章　蒔絵以外の装飾法」「第九章　乾漆」「第十章　彫漆」。

我が国初の総合的漆工研究の著である。(注1)

そして、この『日本漆工の研究』は翌昭和九年（一九三四）帝国学士院賞を受賞している。日本工芸の研究書でこれほどの評価を受けた著はこれ以前にも以後にもない。因に著者澤口は五十一歳、その肩書は「工業試験所技師・東京美術学校講師」である。

帝室博物館技手、勲八等瑞宝章、四十八歳の吉野富雄は、明治二十

三年創立の「社団法人日本漆工會」の機関誌『漆と工藝』昭和八年一月～十二月号（三八一－三九二）に毎号論文・評論を発表する。

「幸阿彌五代宗伯の作品に就て」（一月）。「鎌倉時代に於ける漆工志料」（同）。「鎌倉時代の蒔繪遺品（上）」（二月）。「同（下）」（三月）。「落花有情」（四月）。「奈良朝に於ける漆棺に就て」（五月）。「松田君の外遊」（同）。「漆藝は實用第一也」（六月）。「光悦作竹蒔繪硯箱と名物春日山蒔繪硯箱」（七月）。「地方色を尊重せよ」（同）。「非常時とは」（八月）。「鎌倉時代蒔繪小筥の探究（一）」（九月）。「産業と生活の基礎」（同）。「鎌倉時代蒔繪小筥の探究（二）」（十月）。「藝術は悠久」（同）。「東洋最古の漆器」（十一月）。「手藝と機械工業」（同）。

この驚くべき論文・評論の著述は昭和四年「日本漆工會」の機関誌『日本漆工會雑誌』を昭和二年『日本漆工會報告』と変更し、さらにこの年、吉野富雄をして『漆と工藝』に改題したことにはじまる。「漆工に於ける日本と支那との関係」がその嚆矢である。以後『漆と工藝』が廃刊になるまで続く（昭和十九年）[注]。

そして、この年掲載の論文で注目しなければならないものの一つは「奈良朝に於ける漆棺に就て」。この論文は明治十一年に著述された黒川真頼『工藝志料』批判であるからである。『工藝志料』は我が国初の工芸史研究の書であるが、吉野はこの書に批判的であった。

「漆工史に関する限り諸家の引用する文献はよく『工藝志料』から出て居るが（略）然し乍ら誤謬と誤釈とは至る処に充満し、出典を示さぬ者大半を占めそのまま借用するときは、単に学者自身の面目を損するのみでなく、無意識の間に世人を誤る罪が甚深い」（『漆と工藝』三七六号　昭和七年）

ここに指摘した出典・誤謬・誤釈をこの論文をもって証明したものであったからだ。これは学問の一歩前進といわねばなるまい。

次にこの年の『漆と工藝』に著述した吉野（吉野生）の評論について触れたい。この年七本の評論を投稿している。これらを読むにほとんど現在我が国の漆工界にいわれている論評と変りがないのではないか。と筆者には感じられる。漆工界においては、昭和八年、すでに現在が予測できたのではないか、とさえ推測されるのである。

言く「近時輸出は次第に衰へ、内地に於ても舊器の需要は日に減じて新用途は之に伴はず、益退嬰の状態にあるのは恰も財産家の息が祖先の遺産を食ふのみで、少しも稼がないのと同様である。此儘では益衰微するのみであろう（「漆の効力を宣傳せよ」）

「科學に行き詰うた欧洲には東洋文化の研究と應用とが甚だ盛んになって、建築にも美術にもその影響が頗る著しい。（略）之に反して現代の日本は餘りに欧米に心醉して眞價ある多くの國風を失ひつゝあるのは洵になげかはしい。（略）然るに我漆藝は古き傳統と新しき研究とにより今や何物よりも自由に且つ優秀なる効果を擧げ得るものである。」（「建築界に進出せよ」）

「漆藝は日本の特技として千數百年の傳統を保ち、今日尚ほ國家産

業の一大分野を成して居る。然るにその加工品の多くは徒に舊慣に捉はれ、外觀の微を衒ふのみで殆んど實用を乖れた玩具的の物と見られるに至った」（「漆藝は實用第一也」）

「近年工藝の全國的傾向を見ると、一齊に同一方向を逐ふて居る。即ち帝展などで受賞したものなどの安き模倣である。蓋し明治以來上下を通じての劃一主義の結果で、總てが東京風に進むで居る事である。又同時に欧化主義の餘風を受けて妙な洋風が行はれて居る」（「地方色を尊重せよ」）

さらに吉野富雄については、彼のライフワークである『時代蒔繪髹漆集成』については後述する。

次に、東京美術学校漆工科助教授、三十七歳の松田権六の、この年に触れたい。吉野富雄は『漆と工藝』五月号（三八五号）に「松田君の外遊」と題して次の文を掲げている。

「本會評議員松田權六氏は六月十四日東京出發倫敦へ直行、歐洲諸國を一巡して今年末迄に歸朝の豫定で外遊する事になった。用件はロンドンのダンヒル商會發賣の喫烟具が主として日本漆で髹飾される事になり、豫て其事業に鞅掌して居た所から指導の爲め招聘されるに至ったのである。ロンドンの滞在は約一ケ月であるが、巴里には目下君の帝展作品「談話室」がメープル商店に陳列されて居り、香水王コテー氏經營中のルイ十四世別莊修築の爲に並木製作所から送られた髹飾見本や圖案類も近々到着する事になって居るので、君の技術的説明は是が採否に重大の役割を務める事であらう。今や日本漆が歐洲に多大の影響を起しつゝあるの際、君の如き卓越した技術家を送る事は我業界に豐富な資料を齎すべく、且つ漆工教育上にも益する所多かるべきを思ひ、君が前途の安泰を祈る次第である。（八・五・廿一・野生）」

これらの詳細については拙著『漆　その工芸に魅せられた人たち』（平成十三年、講談社）を参照されたい。ここでも書いているが、実はその外遊には「並木製作所」（現パイロット万年筆）和田節治が大きく拘っていた。このことも同書にくわしい。

ダンヒル商會、パイプに日本漆を、第十三回帝展作品「談話室」（現在ギメ美術館蔵）、香水王コテー氏のルイ十四世別荘シャトウ・ド・ウロンション修築も、すべて、この和田節治がお膳立をしている。

その意味で『漆と工藝』と並木製作所・和田節治について触れる。ただ、帰国後すぐに同誌に発表した松田権六の「盲人象を探る」はヨーロッパの美術館・博物館をするどく観察している。さらに以後の本人の作品にヨーロッパ人の視点を入れているのはさすがと感心する。

昭和五年十二月号（三三五号）から同十六年四月号（四五九号）までの『漆と工藝』の裏表紙の広告は一期間を除き全面、並木製作所であり、高級万年筆の宣伝であった。これは同誌の最大のスポンサーが

並木製作所であったことを物語っている。また、当時『漆と工藝』には「漆と工藝後援者芳名」が掲載され顧問男爵益田孝を筆頭に三十六名が名がある。大倉喜七郎・原富太郎・武藤山治、東西の超著名なコレクター、旧大名・美術商などが連記されるが、そこに和田正雄（並木製作所社長、節治次兄）の名がかならず記されていることからも証明されるであろう。

並木製作所は我が国はじめての国産万年筆製作会社、大正七年（一九一八）創立。万年筆の軸を「ラッカナイト」という漆の成分を用いた変色しない材質で加工。さらに、そこに、我が国独特の蒔絵で装飾、ロンドン、パリのダンヒル社と販売契約。「ダンヒル並木高級万年筆」はヨーロッパを席捲していたのである。ただ、ダンヒル並木高級万年筆、第一次のヨーロッパ進出は太平洋戦争以前までであった。このことは『漆と工藝』の刊行とも大いに関係があったとも言えるし、日本の漆工芸の行末とも大きく類似しているとも推察できる。

さて、松田権六が見たヨーロッパ、というよりも、ヨーロッパの漆、漆工、漆工品の製作に注目したい。昭和八年のヨーロッパには漆工芸製作があったのだ。その中心的人物はパリ在住のデュナンと濱中勝。デュナンはフランス人だが漆工芸に興味を示し、盛に独自の作品を製作し後にアメリカから作品集が出版されている。濱中勝は北陸青森の出身、小学校の教師であったが、漆作家に転じ、パリに渡る。パリダンヒル社とも関係があったらしく、並木製作所、和田節治、松田権六との関係から『漆と工藝』にも深く関係し、「本会（漆工会）欧州通信員ヲ依託候事」[注三]とし、数々の記事を掲載している。また松田はヨーロッパの漆工として、パリにはジュナン、濱中、菅原、ロンドンには小泉軍治、阿部、後藤、マーシャルカンパニー、および中国人数名、そして、これらの漆工を、フレンチ・ラッカー、イングリッシュ・ラッカー、支那漆などと関係者はよんでいたと、松田は書いている。[注四]これらは、日本の漆工とはかなり異なるもので、江戸時代からの輸出漆器の影響から誕生した〝ジャパンド・ジャパニング〟とヨーロッパで呼ばれたヨーロッパ製の漆工品であり、ダンヒル並木が蒔絵万年筆から本格的な蒔絵の調度品（化粧道具が主流）を輸出しはじめると、これらは亜流として消滅していく運命にある。

さて、この年、国内の関西、大阪・京都に眼をうつすと『日本漆器新聞』（大正十一年九月一日――昭和八年八月）の発行がある。編集兼発行人は柴崎風岬（俊吉）。発刊の動機、趣旨に「現在漆器界の状勢を眺むるに（略）今や行詰りに近づける悲話嘆息を聴からんとする時（略）渾身一番当事者は先ず自ら樹ってその努力と覚悟を急務とせなければならぬ（略）国技として常に誇る我が漆器界に未だ全国を統一し全国に宣伝すべき機関誌なきは誠に寒心に堪へぬ」この発刊の辞は大正十二年に書かれたもので、日本漆工会の『漆と工藝』の前身『日

本漆工会雑誌』が、関東大震災で一時休刊状態であったためにこのような記述になったものと推察される。そして、本誌の賛助会員、広告掲載者、購読者は決して、京阪居住者に限られてはおらず、また本誌執筆陣も「工芸学校の教諭、商品陳列所の所長、農商務省の役人、農林省や工業試験場の技師、京阪・東京の蒔絵師、漆製造・販売業者など非常にバラエティーに富んでいる。バラエティーに富んでいるだけでなく、著名な人物が多く、東京の赤塚自得、六角紫水、山崎覚太郎、津田信夫、植松包美、堆朱楊成、高村豊周、杉田禾堂、京都の蒔絵師の迎田秋悦、江馬長閑、吉田長春、山田楽全、徳力彦之助、大阪の安原祥窓と驚くばかりのメンバーである。[注八]」ただ、発刊第十一年目、この昭和八年、八月号でこの『日本漆器新聞』は廃刊となっている。

さて、この昭和八年の漆器界の大快挙として『時代蒔繪髹漆集成』を掲げなければならない。厳密にはこの発行は第一輯の発行は昭和九年三月五日である。が、その広告、予約募集は『漆と工藝』昭和八年十二月号（三九二号）に掲載されており、この年、発刊計画が遠大な計画がなされていたことがわかる。

その序に選輯者の一人吉野富雄はいう。

「　序

蒔繪は奈良朝に起り平安朝に至つて發達盛行した我邦獨特の美術であつて、是れ有るが故に美術國としての日本の地位は甚だ高い。古くは宋史高麗史等にも之れが渡來を載せ、近世歐州との交通開けてよりは名聲いよ〳〵四海に弘布して遂に日本（ジャパン）と呼ぶに至り、現今歐米の博物館中之れが爲めに廣大なる陳列室を設けざる無きの狀態である。然るに飜つて我邦の現狀を見るに、帝室博物館に一室を提供せられて居るの外、古名品の多くは富豪の祕庫に收藏せられ、一般民衆とは殆んど關係無きの狀態である。殊に近時美術の出版は汗牛充棟の盛況にも拘らず、未だ蒔繪髹漆の單獨圖集さへ現はれざるは吾人の常に遺憾とする所であつた。彩華社主關君は夙に工藝美術の鼓吹を發願し、先づ彩華三拾六輯をはじめ、泰東工藝百選、名陶我觀、日本名陶選、重要美術品圖錄等の出版に當り、工藝界には既知の人である。今回斯界未到の境地を拓かんとして時代蒔繪髹漆集成てふ豪華版の上梓を企て、來つて是が援助を求めらる。予思ふに幽雅なる古代の作品、燦爛たる江戸の蒔繪は共に結構には相違なきも、餘りに人口に膾炙し、且つ各種の美術書中にも紹介されたるを以て、先づ現代世相に最も近似して、氣魄雄大、變化萬樣、色彩絢爛古今上下を兼ねて、而かも國際影響の顯著なる桃山蒔繪より着手せん事を慫慂し、併せて桃山美術愛好の先輩たる日本美術院四畫伯の指導を乞はしめたるに、幸ひにして諸氏の快諾を得て茲に第一輯を刊行するに至つた事は吾人の欣快措く能はざる所である。思ふに漆工の技は東洋三千年の歴史的工藝で、漆の特質が耐久堅牢にして且つ最新の化學作用をも超越する所に、今や塗裝界

に於ては世界的注視の的となつて居る。されば此の企が啻に古器の鑑賞に止まらず、現代の繪畫や工藝に寄與する所も蓋し意想の外に在るであらう。

昭和第九春二月廿三日　東宮御誕生祝賀節　於大東京中川畔之寓居

吉野富雄記」

冒頭の澤口悟一の「自序」と比較されるのも一興であろう。

広告は記す。

「時代蒔繪髹漆集成刊行規定

一、本集は**桃山時代**前後の蒔繪及び髹漆につき、最も**藝術味**豊かにして、**意匠文様**の面白きものを選定し、一々詳細の解説を附し、つとめて未發表のものを收む。

一、本集の内容は左の通り分類して刊行す。

(一) 蒔繪　コロタイプ版

(二) 色漆　全部原色版

(三) 蜜陀繪　或は木版刷　**色漆、蜜陀繪**の二種にて約五十枚

(四) 螺鈿　コロタイプ版　**蒔繪、螺鈿、堆朱**の三種約壹百枚

(五) 堆朱　コロタイプ版

一、本集は毎輯拾貳參枚宛、毎月刊行一ヶ年拾貳輯にて第壹期完成の豫定

體裁

○大さ縦一尺三寸、横一尺の豪華版
○用紙別誂手灑耳付鳥子紙、紙帙入
○毎輯解説一綴、完成の上合本に便
○完結の際面落棧蓋赤漆桐函深さ二寸の容器を添ゆ

會費及拂込法

會費は毎輯金四圓也とし、市内は現品引換に、地方は集金郵便による事。
地方會員の御方は別に送料（金貳拾錢）御負擔を乞ふ。

豫約申込所　東京市小石川區關口町一七一（振替口座東京六八一六五番）　**彩華社**」

そして第壹輯には次が掲載されている。

「時代蒔繪髹漆集成　第壹輯

目錄

第一圖　櫻山鵲蒔繪硯箱蓋甲　東京　武藤山治氏藏
第二圖　同　内部　同　同
第三圖　誰袖蒔繪硯箱　大磯　安田靫彦氏藏
第四圖　旭海邊蒔繪鏡筥　東京　長野草風氏藏
第五圖　鯉蒔繪盆　同　松田權六氏藏
第六圖　松竹梅蒔繪棗　同　吉野富雄氏藏
第七圖　松竹梅蒔繪平棗　同　上杉伯爵家藏
蒔繪兩掛硯箱

第八圖　同　內容品　同　同
第九圖　鶉粟蒔繪硯箱　和歌山　伊藤甲子之助氏藏
第一〇圖　烟管蒔繪脇箪笥　横濱　前田青邨氏藏
第一一圖　荏柄天神緣起箱　東京　前田侯爵家藏
第一二圖　遊女蒔繪盆　同　山村耕花氏藏
第一三圖　人物漆繪膳五枚ノ內　同　吉野富雄氏藏
第一四圖　唐人物油繪膳五枚ノ內　同　帝室博物館藏

以上」

そして奥付。

昭和九年三月三日印刷
昭和九年三月五日發行

第一輯　會費　金四圓也

選　吉野富雄
輯　長野草風
者　山村耕花
　　安田靱彦
　　前田青邨
（順はろい）

發行所　東京市小石川區關口町一七一　彩華社

右代表者　關宇一郎
寫眞及印刷　大塚巧藝社
原色版　中島泰成閣

選輯者　長野・山村・安田・前田はすべて東京美術学校出身の日本画家。

彩華社代表の関宇一郎は編輯後記で自己紹介をしている。後述。

「写真及印刷　大塚巧藝社」は現存する東京の美術印刷会社。「原色版　中島泰成閣（後　光琳社）」は京都の美術出版社である。

「編輯後記

片輪車蒔繪手筥は三十萬圓を以て故小倉常吉氏の有に歸し、上井家の浮線綾蒔繪手筥は三十五萬圓に落札せられて古美術品中の最高價値を發揮しました。上下一千餘年の歴史を有する日本獨得の工藝、全世界から日本の敬稱を以て呼ばるゝ時代蒔繪の單獨圖集が、疾に出づべくして出なかつたのは一種の國辱とも云ふべきでありませう。

私（関宇一郎）は皆様の御援助によりまして久しく美術の出版に携はつて居りましたが、今や漸く老境に入りましたので最後の奉仕として今回豪華版時代蒔繪螺鈿集成の出版を企てました。幸ひ諸先生方の御指導によりまして意想外の好果を擧げる事を得ましたのは欣快の至りであります。

何分内容が最高優美の美術品でありますので、用紙から解説包裝に至るまで總て日本趣味に一貫させることに致しました。殊に圖版の右

方に三分の餘裕を置きましたのは、後日製本の場合を慮つた故で、また解説を一點毎に別丁刷としたのも、完成後分類の自由に便した次第であります。

諸先生方には去年十二月一日の晩に御會合を願ひ、第一輯の御選定を煩はしましたが、其の折は一月發行の豫定でありましたので成るべく正月に因んだ圖樣に致しましたが、創刊の際とて何かと大事を取つた爲めに發行が遷延しまして、早くから御申込の方々には洵に申譯ない次第に存じます。

私の特に感銘しましたのは諸先生方の御親切で、啻に内容の御選定を願つたばかりでなく、御藏品の提供、所藏家の御紹介、同好者の勸誘等有ゆる御厚情を傾けられました事で、その御責任を重んぜらるゝ態度は、出版者たる私以上で、其の結果は御覽の通りの立派な内容となつた次第であります。

包裝の題箋は安田靫彦先生の御名筆を煩はし、解説は吉野富雄先生に御依賴する事に致しました。從來諸書に挿まれた蒔繪の解説は、假令それが名家の執筆であつたにしろ、技術上の事は全然問題にならず、從つて片輪のものでありました。此點に於ては技術家出身であり、且つ專門に鑑賞と研究に沒頭せられて居る吉野先生は實に斯界に於ける特殊の存在で、從來の漆工史は先生によつて根本的に改造されつゝあります。殊に先生は名利の外に立つて至誠一貫、漆の爲めに大に氣を吐かるる方でありますから、此度本集成に御參加を得た事は、最大なる權威と存じます。

本集成の發行は洵に天の時を得たもので、非常時國風發揮の折に此の國產工藝の精華を紹介する事でありますから、蒔繪の愛好熱は必ずや勃興するでありませう。吾々は是に應じて月一回位同好相集つて一夕の清談を交したいと存じて居ります。

かくて本集成が一般鑑賞家に便し、美術家の好資料となり、漆工藝術の價値を高め、ひいて國產の奬勵ともなりますならば、老生の本懷は之れに過ぎざる次第であります。何卒微衷御推察下され、滿天下の各位に御後援を仰ぐ次第であります。（九、三、三、彩華社　關宇一郎謹白）」

第二輯の編輯会議は東京湯島の国醇堂倶楽部で開かれた。その席には和歌山から駆けつけた蒐集家伊藤甲子之助をはじめ東京美術学校の松田権六、帝室博物館の溝口三郎、さらにコレクターの有尾佐治、岡田正吉などが同席し、自慢の蔵品を持ち寄っている。この会はその後「時代蒔繪同好会」と命名されて、会費一圓と定め、会員も徐々に増

えていった。

また、会には溝口禎次郎、香取秀真、藤懸静也などの学者が賛助会員として集い、研究会・清談会の趣があったという。(註六)

初めはこの『集成』は毎月一回発行。第一期十二輯で終わる予定であった。そして一輯四円の会費をあてるつもりであった。しかし、諸事情により年六回となり、延々続いて昭和十八年（一九四三）まで二十五輯を数えることとなる。掲載図版三一五図、掲載作品二〇一件、所蔵者数六五名である。

昭和十七年、十一月二十八日、東京青山の根津美術館において収録作品から三十余件を選んで展覧に供した。「予が微力身を挺して本集成に没頭する所以は実は日本独創の蒔絵を通じて美術鑑賞の基準を闡明せんの大願に発したまでである。今や時局重大一億一心の集結を要する時、美術界単り安閑たる可きではない」（二五輯「編輯後記」）

さて、昭和八年とは、漆で語るとしたら、以上のようになろうか。後世、マスコミは冒頭でも掲げたようにこの年を「非常時日本」とネーミングしている。

吉野富雄は「漆と工藝」八月号（三八八号）で次のように論評している。

「非常時の聲を聞く事既に久しい。併しながら非常時の何たるかは具體的には甚だ掴み難き感がある。戰爭か？然り!!!全世界を擧げて、國と國と民族と民族との廣い範圍の競り合が實に猛烈になつて來た。昔の様な寧ろ人爲的な小戰爭ではない。恰もノアの洪水の如く、餘れる勢力は世界の到る處へ溢れ出て低き處は悉く沈没される。各國は各堤防を築いて是が防護に浮身をやつして居る。輸出奬勵、國産愛用の叫は實は非常時其物である。しかし自分ばかり賣つて儲けて、人からは買はないといふ事は不可能である。この様な無理を通さねばならぬ世の中が即ち非常時で、國民は此の間に處してはまづ自給自足を以つて基礎とするの外はない。夫れには良品を安く提供することで、安き良品が山積すれば自然に洪水となつて他國の堤防を決潰させる事にならう。吾特産漆工も粗製の評を聞くことが久しい。相誠めて堅實なる製品に精進する事である。（八・八・廿六・野生）」

刻々と軍靴の響が間近にあるのも予期せず（予期したくなく）、まだのんびりとしている。

庶民にとってはこのような年であったのだろうか。

昭和　八　年（一九三三）　国際連盟脱退。
昭和十一年（一九三六）　二・二六事件。日独防共協定。
昭和十二年（一九三七）　日中戦争（盧溝橋事件）。
昭和十五年（一九四〇）　日独伊三国軍事同盟締結。

昭和十六年（一九四一）　太平洋戦争。
昭和二十年（一九四五）　ポツダム宣言受諾。敗戦。

さて、蛇足ともなろうが、この稿に登場した人物の敗戦後を簡単に書いておく。

澤口悟一　疎開先の仙台で空襲にあう。昭和二十二年「仙宝工芸株式会社」を起し、高蒔絵の大量生産、パルプの成型素地による高級輸出漆器を生産。のち郷里鳴子に帰り「鳴子漆工株式会社」を設立「竜文塗」を製作。最晩年『日本漆工の研究』の改訂版執筆、出版。(注七)

吉野富雄　敗戦と同時に帝室博物館学芸委員解任。翌年、東京美術学校講師。『大和文華』に論文を書き続ける。昭和三十六年死亡。死後『日本漆工史私稿』刊行。

松田権六　昭和三十年蒔絵の重要無形文化財保持者（人間国宝）。日本工芸会理事長。昭和五十一年文化勲章受章。

和田節治　敗戦でインドネシアで捕虜となり、昭和二十一年帰国。マラリアに冒されていた。その後、平塚に工場を建設。「パイロット蒔絵品生産及び輸出販売」を計画。代表取締役社長として将来構想を唸り、実行、発展に尽力する。

注

（一）第二章以降は本邦初の記述であり、特に第二章の「全国漆器生産及輸出の概況」は特筆に値する。ただ、第一章「漆工史」は黒川直頼『工藝志料』の引用が目立つ。

（二）これらは吉野自から「編集のうえ製本までいたし常に手許に置いて」をり、死後夫人の手で出版した『日本漆工史私稿』にまとめられている。

（三）『漆と工藝』昭和八年四月号（三八四号）。

（四）『漆その工芸に魅せられた人たち』（拙著　講談社　二〇〇一年九月）。

（五）「日本漆器新聞と柴崎風岬」洲鎌佐智子『京都文化博物館研究紀要』第十二集二〇〇〇年三月。

（六）『時代蒔繪漆集成　編輯後記

（七）改訂版では『第二章「漆器生産地と輸出漆器」（初版では全國漆器生産及輸出の概況」）の記述が極端に省略されている。戦禍による産地の荒廃を物語っているものであろう。また、どの産地でも、後継者不足、技術の低下、市場の不安定などが言下に読みとれる。